

上
杉
謙
信

登場人名

長尾平三景虎 (後、上杉政虎入道謙信) (貳拾貳歲)

上杉民部太輔憲政 (凡四拾歲)

宇佐美駿河守定行 (凡五拾歲)

赤倉五郎國武 (貳拾壹歲)

侍女 妙高 (實は赤倉五郎妹妙高) (拾八歲)

侍女 小鹿

同 宮路

同 小杉

同 明石

近侍武士數名

所 春日山城内奥庭

時 天文二十年八月のこと

上杉謙信

春日山城内の奥庭、少しく上手に寄せて歡喜天の祠あり、祠前には燈火を點じ、白木の三寶に瓶子を始め數々の供物あり、下手には老松あり、月その上に懸りて皎々たり、上手に捨石あり。侍女四人下手より立並びつゝ三寶に載せたる供物を取次ぎて祠前に供ふ。一二回にして終る。尤も下手に近き侍女明石、

明石 是れで終りに成りました。

小鹿 やれ／＼漸く濟みましたか、ほんに女の分際で、神主らしい御供へもの。

宮路 頼うだ方は御年若ぢやに、きつい信心。毎日毎夜の御參拜。

小杉 殿振りも一段と、風流なお生れつき、其上に武勇達者の御軍配。

明石 揚卷を敵に見せた事はなく、人に勝れし荒武者でも、戀の道には一向御初心。

小鹿 御添伏も定まらず、ほんに何處の姫御寮が、お腰入の初契、え、もそれを思へば、氣の苛れる事でおじやるわいなあ。

宮路 小鹿御、いまだ知らずにか、頼うだ方の戀人の目前におじやるを知らずとは、さても鈍な眼ぢやな。

小鹿 なに、我君様に戀人がある、それはまた誰ぢやわいな、早く聞かせて下されや。

小杉 さても小鹿御のけうとい口のききさまや、御城に奉公しながら、まだそれを知らぬとは、喃宮路殿。

宮路 されば小鹿御の眼はほんの節穴ぢや、お身あの御月様が見えるかいの。

明石 宮路殿、さうは虐めぬものぢや、有様は妾も知らぬ程に、どうぞ教へて下されや。

宮路 明石御も知らずとあらば、教へても遣りませう。

小鹿 早う聞かして下され。

宮路 頼うだ方の戀人は、御城内に、おじやるわいなア。

小鹿 なんぢや、御城内に、お、耻かしい。

小杉 何が耻かしい、顔を隠して、おほ、、、、、小鹿御の我れ惚れか。

皆々 おほ、、、。

小鹿 何を笑やるぞ、何時ぞや我君様が、小鹿、其方の顔は名の通り面白いと仰有つたは。

宮路 小鹿御、戲言は止めになされ、聞きたうなくば、語らぬまでぢやに。

小鹿 聞きたいから願うて居るではないか。

宮路 頼うだ人の戀人は、あの妙高殿でおりやるわいな。

明石 なんぢや妙高殿、今夜の番の妙高殿、あ、果報ものよな。

小杉 あれ、その妙高殿が、夜詰の姿で参られます。

(侍女妙高、白服を着て上場。)

妙高 我れ耻かしき此姿、(侍女等に向ひ)皆様御苦勞にござります、神前への供へ物は整ひまして候や。

小鹿 大果報の妙高さま。

宮路 仕合せ者の妙高さま。

小杉 あたお目出たい妙高さま。

明石 お羨ましい妙高さま。

小鹿 御神前の御供物は、薑、大根、南蠻辛、

宮路 小栗、柑子、柿、茸子。

小杉 豕の油も二升三升。

明石 用意落なく揃ひましたが。

小鹿 まだ有合さぬ桂男。

宮路 月の都を立出でて。

小杉 程なうこへ。

明石 天降らうぞや。

「侍女下場、妙高祠前に至り、立ちながら拜を爲しつゝ、供物を調べ、祠の上手に敷きある筵の上に坐せむとしながら」

妙高

いま侍女達の黝れる言葉、嬉しい中にも悲しき心地、忍ぶ草は秋なりとて萌えづるものか耻かしや、戀はかくまで孱弱いものか、父の敵長尾平三景虎といふ人が、何として懐かしいか、心に邪見の刃を磨く、女の胸にも宿る月、うら表なき景虎様、御氣性は鏡を割つたる鮮やかさ、鋭き嫉刃も曇りやすい米山嵐、礫の雨、後では霽るる嵐のさまが欲しいものぢや、愁結むすびかへる雲の幕、霧の圍を脱け出で、眞如の影が宿したい、ああ情ない父上様、そも何つの世に恨あつてか、戀しい、ゆかしい、我君様とは敵となつたぞ、今生に残れる娘の、天とも日とも頼んだ人と、仇敵とはなられたぞ、恨めしい父上、憎らしい父上、宿世にいかなる悪縁の、いま妙高とは生れたぞ、とはいへ父が亡ほされしは、單へに君の采配なれば、敵は正しく敵なれ、名の方に戀は立ちたれども、孝は微とも盡くしはせず、戀と孝とを秤量にかけて、何れが重い、ええ悲しい、情けない、依然やはり孝は重いのぢや、戀に捨てなむ命もがな、その様な命があるなら妙高は欲しい、二つの生命がもしあらば、ああ妙高がなんで敵を持つた、景虎様を敵に持つたぞ、あの朗かな御ン聲、濃きおん眉、涼しき目元……………

(柱に倚りて倒るる様に筵の上に坐す、景虎上場。)

景虎

妙高如何致した。

妙高

是は我君様の御参詣にも心付かず、無禮の段は幾重にも御免し下さりませ。

(妙高幣を取りて景虎を祓ふ、景虎恭しく拜を爲して、祠前を退き)

景虎

妙高、是へ参れ。

妙高

はあ。

(白張を脱ぎ、庭に來りて跪く。景虎は上手の石に腰を掛けたり。)

景虎

歡喜尊天への奉公、祈願を成就なさしめむには、清き女の血汐を贄に捧げよと驗者は申せど、一人の祈願の爲に罪なき者を屠らむこと、非道の至と辭みしに、さあらば百日の其間、少女を神仕へに致せといふ、さる間、汝達が毎夜々々の宮仕へ、其身に應ぜぬ業、さぞ辛勞にありつらむ。

妙高

數には入らぬ賤しい妾達への御言葉、たとへ火に入り水を踏むとも我君への忠義とあれば、命捨つるも惜からず。

景虎

其言葉に偽りなくば、かねてよりの詞の端々、渡りに便船はなど貸さぬ、我れ生れ付きて短慮の性なり、一日に一事を爲すを以て足れりとせず、事に透間のあるを忌む、未明あさまかより軍馬の駆引、あは諸家の陣法、繩張の鍛錬に心を休むる折もなく、明るも暮るるも軍の手配、唯おことと語ら

ふ隙間のみ、閨月の心地なす、諸家より櫛の齒を引く如き、縁組の中込にも耳傾けぬ景虎は、始めて戀の味ひをおことの爲に知りたるぞや、いかなれば心強くも我意には隨ひたまはぬ、人目もあらぬ奥庭に、幸ひおことと我とのみ、心の中ぞ聞かまほしけれ。

妙高

大河に潛める鯉の肚には苦き肝の候へど、溝の泥こひぢに住む鮎あじの、賤しき身には何として語りあけむ答あるべき。君は尊き梢の御ん身、吾身は地をはひまはる、かつらよりも果敢なき身、日に日に勝る園原の、木賊の如き憂き思ひ、心の利鎌に刈り兼てこそ候なれ。

景虎

言葉巧に申されしが、系圖を望む景虎ならず、おことの姿、おことの心、あはれおことこそ、我れに叶へる女ぞ、一國一城に久しく過ごさむ我にはあらず、天地にあることならば、いかなる望も叶ひ得させむに、我に隨ひたまはずや、や、答はなく、そも何の爲めの涙ぞ。

妙高

嬉しき仰せ、ああ御ん言葉を止めさせたまへ、妾の心は儂りなき、誠を籠めたる涙の玉にそれと御知り候へかし。

景虎

富貴を以ても奪ひ難きに、益す募る我が思、所詮おことの心中には、女の身にて代へ難き、貞操といへるもの、潛みありと見しは僻目か。

妙高

心に潛めるものとは、君を思ふ誠にこそ侍るなれ、おん心に隨はば、色に溺るる醜みにくの名は、御ん名の上に蒙りたまはむ。

景虎 いいや、いかに云ふとも、おことの胸は水鳥の、下安からぬ騒ぎあらむ。

妙高 狭き女の心には、他言入るる席は候はらず。

景虎 然と左様か、未だ熟せぬ柿の實は、霜の來るを待つべけれど、もし盗人の忍び入らば、盪しといへども拂ひ落し、決して他人に與へぬぞ。

(次第に月に雲かかりて昏くなる。)

妙高 底に包める疑の、晴れやらぬ雲の月をば、お、暗くとも心は月夜。

(胸に藏せる短刀を撫でて泣く。)

妙高 我君様、女の身の一大事、此御返事は東明の御參拜まで御待なされて下さりませ。

景虎 待てとあらば待ちもしつべし、既に思案も幾度か、潮の満干も重ねし望月、満つれば缺くる十六夜の、汐の下りにならぬうち。

妙高 胸推し開くおん返事。

景虎 吉左右を待たうぞ。

(老臣宇佐美定行慌だしく上場。)

定行 我君、是に入らせられたか。

景虎 定行か、其方に似ぬ慌だしさ、何事の起つたぞ。

定行 思も寄らぬ一大事、目下上野に御動座の管領山之内家殿、只今参着致され、夜陰ながら火急御面談ありたきとのこと。

景虎 管領自身に参られしとな。

定行 供廻りも手薄にての御入、兼ねて隠密共の申すにも違はず、時を追はれて来りしものなるべし、恐れながら御賢慮いかに。

景虎 窮鳥懐に入るときは獵師も之を捕ふることなし、況んや長尾は上杉累代被官の身なり、且つは景虎弱冠にして、未だ漸く一國に主たるを、頼むとあらば惜からぬ、命は一期、名は末代、頼まれうと思ふがどうぢや。

(定行感して手を拍ち)

定行 したり管領殿に逢ひ参らせてより、某の考案漸く今に其處に到り候、けに掌は拍てば鳴る、此上は直ちに御對面。

景虎 夜中ながら見参に入らむ、妙高歡喜天への奉公よく心せよ。

(景虎定行を従へて下場。)

妙高 ああ我胸のせつなさ、つらさ、大千世界を賜ふとて、代へはつまじき御ん情。

(月出づ、松の蔭より赤倉五郎國武出て来る。)

赤倉 妙高、々々。

妙高 兄上か。

赤倉 叱ッ。

赤倉

(赤倉五郎は筵を取りて地に敷き、妙高を坐せしめ、自身は老松の幹に腰を下ろし)

いかに妙高、御ン身を此城中に奉公させしも、單に敵景虎を討たむが爲めなり、所懐を漏らして既に百日に餘れども、未だに好き耳なきは、戀に性根を奪はれしよな、女心と云ひながら、現在父君の敵を捨つる不孝の女め。

妙高

不孝とのみ仰あれば、更に二の句は次ぎ難し、さりながら兄御前よつく聞きさむらへ、館を父の御敵とは奉公の始にはなど聞かせたまはぬぞ、思ふ仔細のありとのみにて、つい館殿へ仕へ申せば、世に珍らしき慈み、御情は五臟六腑に浸み渡り、恐れながら兄上ふりもゆかしく思ふを、敵とは疎ましや、情ないは兄上、只一人の妹に、生半大事を包みたまへばこそ、始より敵と知らば、よも心の錠は許さじものを、情ない、冷たい御心根、不孝の娘には誰がした、不孝とは其の冷い唇から、よくまア仰せられましたな。

赤倉

そは某が過なり、それを度々宣ふは、唯に兄を苦むるのみ、始より打明けぬは、可愼つよまとは云ひながら、さすが女の思慮淺く、漏れもやせむとの懸念なりしを、さのみ咎めは候ひそよ、さはいへ過

ちは兄の事、敵は父の爲めならずや。

妙高　されば討たぬとは云ひ侍らず。

赤倉　さあらば何とて今夜の如き、働き時をば知らせたまはぬ、彼一人と相討せば、いかに猛しと申すとも、本意を達せむは易かりしに、惜しき時を去なせしも、單に御身の迷ひ故ぞ。

妙高　迷……………戀……………

赤倉　戀を捨つるか、命を捨つるか、兄と妹の分れの返事ぢや。

(妙高懐劍を示し)

妙高　戀を……………、戀を捨てやう、……………今宵を去らず敵を討たう。

赤倉　父の遺物に誓を懸けて、討つと云つても女の腕、その懐劍にては危き事なり、勇士を亡すには近頃卑怯に似たれども、弓矢神も御免あれ、此一藥は烏頭の毒、それなる神酒に之を混じ、命を縮め申されい。

妙高　すりや其藥を。

赤倉　それなる瓶子に。

(赤倉瓶子に藥を混じ)

赤倉　我れは木蔭に忍び居て、事の成就を相待つべし、父への孝を忘れたまふな。

(赤倉下場。蟲聲起る。妙高懐中より紅筆を出し、懐紙に遺書を認む。終りて懐劍に巻付け推戴きて懐中に藏す。景虎上場。)

妙高 や、や、我君様の不時の御入は。

景虎 歡喜天の御ン加護か、我が運命の幸先は今宵より開くるぞ、この喜悅を尊前に申さむ爲めに來りしなれ。いかに妙高、音にも聞きつらむ、關東八ヶ國の管領上杉殿、我れを猶子として上杉の姓を與へられ、管領職まで讓られたり。なほ其上に愛娘鶴姬殿を妻合さむとありしを、達て不みし心中は、既に汝は知り居る苦、かくまで思ふを振捨てて、白晝よひの如き月にも耻ず、御寶前にて男と語らひ我に耻辱を與へしは、近頃以て不思議の舉動、不届の女め。

妙高 お情なき其御詞、なにしに妾が……

景虎 いふな女、千軍萬馬の合戦の衝も、鎧の臙の袖の色さへ、見誤らぬ景虎の眼は淨玻璃、入るを許さぬ庭内に、物語せし男は誰ぞ。

(妙高答を爲さず、寶前の瓶子を取りて地に擲つ。)

景虎 や、神に向つて狼藉なすは、分疏なさの狂人もどきか。

妙高 御身の願を碍けむ爲め。

景虎 無禮ものめ。

(二刀の下に妙高を斬る。近侍駆け来る。)

景虎 何事ぢや。

近侍 御庭内にて曲者を召捕りました。

景虎 是へ引け。

近侍 はッ。

(近侍下場。景虎刀にて妙高の死骸を指し)

景虎 地獄の道の案内者は追付け後より遣はずぞ。

(赤倉五郎繩に掛り、近侍数人に護られて上場。)

景虎 我が城内を徘徊せる曲者、そも已れは何者なるぞ。

赤倉 我こそは汝が爲めに亡びし、黒田和泉守國忠の嫡男に、赤倉五郎國武なり。父の敵を狙はむと、多年の苦慮も晝餅に歸し、かく捕はれし上からは、早く首を撥ねられ候へ。や、や、妹も討たれたるか。いかに景虎殿、その亡骸こそ某が唯一人の妹にて候ふぞや、假令本望は達せずとも、兄妹一時に敵の手に死せむは勇士の本懐なり、片時も早く某を冥土の旅に赴かされよ。

景虎 妙高は汝の妹とか、瓶子を取りて地に擲ち、我が信心を侮りし故、只一刀に息を止めたり。

赤倉 や、や、や、なに瓶子を擲ちしとか、萬に一つの望も同じく微塵に失せたるか、天下に友なき我

等が身の上、誰か志を接ぐものあらむ。いざ此上は包まず語り申さむ、某他國を旅せる中、父は御身に討れたまひ、その無念遣る方なく、君を狙ひ申せども、警固厳しく及び難かり、妹に申付け、傳を求めて御傍近う仕へさせ、やがて大事を打明けしに、戀はあはれにも憎きものかな、何時かは君を思ひ參らせ、兎角に孝を忘るる有様、近頃卑怯、御蔑視も耻かしけれど、烏頭の毒を神酒に混じ、君を失ひ參らせむと企てたりしが、戀とはさても條理なきもの、己れが命を縮めてまで、敵の齡を延ばしたれ、その瓶子には某が秘藥を注ぎ候ひしなる。

景虎 うむ。

(考へつつ妙高の死骸を見る。片手に持ちたりし懷劍を見て之を取る。巻付けたる道書を見て驚きつつ讀む)
景虎 『この守り刀の子にて候ふ悲しさを、思ひ遣り下さるべく候、戀に沸きかへり候ふ血汐を贄に捧げて御武運を祈り候べく候かしこ……景虎の軍神、命の親、三千世界の戀といふ戀を集め、情といふ情を蒐めて、唯一人の妙高にあり、御身の外には未來永々、景虎に妻はなきぞ。』

(と妙高の死骸を抱く。)

赤倉 爲すこと違ひし我に引換へ、妹は幸福もの、いざ景虎殿、御身を狙ひ、剩へ卑怯にも毒藥をもて害せむとしたる、赤倉五郎を斬りたまへ。

景虎 不便ながらも成敗なさむ。

（景虎立ちて赤倉五郎の髻を切り、また繩を切る。）

景虎 汝の命は今日が終り、今よりは此世に在らぬ人々に語らふべき法師の身ぞ、我も甲冑は纏へども、戀しき寐覺の折々は、亡き人に見え語らむ身となるべし。

（自ら髻を切り刀を鞘に収む。上杉民部太輔憲政、宇佐美定行を従へて上場。）

定行 御主君へ申し候、人馬の手當整ひたれば、御用意あらうするにて候。

景虎 太儀々々、いかに御父上殿、長尾流の軍立を、何とか御覽候ひつる。

憲政 今夜頼みし加勢の人数を、鶏未だ鳴かぬ中に、はや出陣とは逸物の、鷹も及ばぬ神速なり、新管領殿の御働き、目醒しくこそ候なれ、不勝には候へど猶子の實を立つる爲め、あはれ名乗の一字を進らせむ、是よりは景虎を改めて、政虎と御名乗り候へ。

景虎 今は出家し候へども、武遍は捨てぬ某、今より上杉政虎入道謙信と名乗るべし、御父上殿、御息女を申受けぬは、この入道に察したまへ、仔細ありて一生不犯に過すなり、法體は仕れど、方便の弓に矢を接つけ降魔の利劍を打振つて、程なく天下を靜ならしめ、塗炭に陥る百姓を、救ひ申さば其功德、經誦むには勝るべし。

赤倉 我れはそれには引換へて、習はぬ經を讀み覚え、鉦打鳴らし戦場の、草の葉末に朽ち果つる勇者の後を弔はむ。

景虎 我れは父の慈、

赤倉 これは母の悲、

景虎 よし行は變はるとも、

赤倉 志は、

二人 一定なり。

(鶏鳴く。)

景虎 冬の來らぬ其内に、上野一國を切り從へなば、來む春の便りなるべし、いざ是れより直様打立たむ。

—幕—

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青々
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番